

# 古文を読み味わう能力を高める指導法の工夫

酒井まゆみ<sup>1</sup>

生徒の心をとらえる古文の授業づくりを実現するために、段階を追って作品を読み進める指導法を考えた。第1段階では、教具を工夫し、言葉や表現を手がかりに古人の心情を読み取らせる。第2段階では、グループワークによる他作品との比較読み、表現活動、さらに舞台映像の視聴も取り入れながら、作品を重層的に理解させる。この指導法による授業の実践を通して、古文を読み味わう能力の高まりを検証した。

## はじめに

平成18年12月に、教育基本法が改正され、豊かな人間性の育成や伝統の継承を目指す教育の推進等が規定された。それを踏まえた学習指導要領改訂の指針である、平成20年1月の中央教育審議会答申では、言語は「コミュニケーションや感性・情緒の基盤である」としたうえで、「言語活動の充実」や、「伝統や文化に関する教育の充実」が改善事項として挙げられている。また、同答申の「各教科・科目等の内容」の「国語」の中には、「我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する」という記述が見られる。

生徒の感性や情緒を育み、言語力を身に付けさせるためには、古典の中でも、我が国固有の言語文化である古文の優れた表現や奥深い思想に触れさせることが有効である。また、古文学習を通して日本の伝統や文化を受け止めることは、自己を見つめ直し、他者及び異文化理解の基礎を培うことにもつながると考える。

本研究では、古文を対象として、伝統や文化に関する教育の重要性を念頭に置きながら、古文学習の指導法の工夫について探究した。

## 研究の内容

### 1 テーマ設定の理由

平成17年度高等学校教育課程実施状況調査において、古典を読み味わう能力や古典の言語事項に課題があることが指摘された。また、同質問紙調査によると、古文が好きと答えた生徒は全体の8.5%に過ぎず、否定的な回答をした生徒は全体の72.7%にもなった。古文学習においては、学力と学習意欲の両面に課題があることが明らかになり、前述の中央教育審議会答申の内容と関連する結果になっている。

現在の高校生は、文語に触れる機会がきわめて少なく、古文学習をとらえどころのない難しいものと感じている。所属校の生徒への意識調査では、「古文学習

は大切と思う」と答えた生徒が84%にのぼる一方で、「古文学習は難しい」と答える生徒が89%もいた。「古文は受験のためには必要」であるが、「助動詞等の文法事項がわからない」等、言葉や文法の煩雑さから次第に学習を困難に思う生徒の意識がうかがえた。

生徒が古文に対して隔たりを感じ、学習から遠ざかりつつある状況において、求められているのは、作品の魅力に触れさせ、生徒の心をとらえる古文の授業づくりであると考え、「古文を読み味わう能力を高める指導法の工夫」を研究テーマとして設定した。

### 2 古文を読み味わう能力とは

高等学校学習指導要領では、国語科の科目「古典」の目標は、「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる」となっている。この目標を達成するためには、前述の教育課程実施状況調査で課題があると指摘された「古典を読み味わう能力」を高める指導の充実が求められる。この「読み味わう能力」とは、端的に言えば、作品を読解し、さらに鑑賞する能力ということになる。古文の読解と鑑賞について、石井(1982)は、読解を「対象を対象として知的・分析的に認識理解する」もの、鑑賞を「対象を自己のものとして情緒的・総合的に感得する」ものと定義している。それらを踏まえて、本研究における「古文を読み味わう」とは、意味内容を読み取るだけでなく、作品を深く理解し、鑑賞し、得た思いを表現し、伝え合う段階までを含むものととらえる。「古文を読み味わう能力」を高めることで、古文の豊かな世界に触れさせることができれば、古文学習、ひいては日本の伝統や文化への関心も高まり、生涯にわたって古典に親しむ態度も養われるものと考えられる。

### 3 研究の仮説

藤原(1974)は、文章の素材に着目し(素材読み)、文法に留意して構造をとらえ(文法読み)、その上で高い段階の読み(表現読み)に到達する「読解の三段階法」を提唱した。伊東(2003)は、藤原の読解法が「古文読

1 県立七里ガ浜高等学校  
研修分野(国語)

解にきわめて有効な方法である」と述べている。古文学習の実状を踏まえ、生徒に無理なく内容を理解させ、深い読みへと導くためには、段階を追った読みの指導の工夫が必要であると考え。

古文の指導においては、生徒の知識が少ないために、教師が一方的に教授する授業形態が取られがちである。しかし、深い作品理解に至るためには、生徒が主体的に活動し、自ら作品にかかわる場面に授業の中に設けることが必要である。また、作品を単独で読解するだけでなく、他の作品との比較や、友人との学び合いを通して、重層的に作品をとらえることで、作品理解は一層深まり、作品を読み味わう能力も高まるものと考え。先行研究と古文学習の現状とを踏まえ、次のような仮説を立てた。

段階を追った読みの指導法を工夫し、古文の作品を主体的かつ重層的に理解させることで、生徒の古文を読み味わう能力が高まるだろう。

#### 4 検証授業

##### (1) 検証授業の概要

研究の仮説を検証するため、平成19年10月に神奈川県立七里ガ浜高等学校第2学年「古典」選択者2クラス59名を対象に、単元名を「『平家物語』を読み味わう」として、検証授業を行った。

##### ア 授業の組み立て

検証授業は、読みの段階を2つに分けて組み立てた。

第1段階では『平家物語』を読解し、第2段階では副教材と比較読みをし、その成果を表現し、舞台映像の視聴を重ねていくという構成である。

##### イ 教材について

第1段階の教材・・・『平家物語』の「敦盛最期」  
第2段階の教材・・・上記の作品と、謡曲『敦盛』・歌舞伎台本『一谷嫩軍記(いちのたにふたばぐんき)』

軍記物語の最高傑作といわれる『平家物語』は、鎌倉に位置する七里ガ浜高校の生徒にとって、ゆかりの深い作品である。なかでも「敦盛最期」は、生徒と同年代の登場人物の生き様が描かれ、心理描写にも優れている。『平家物語』は、能・浄瑠璃・歌舞伎等、後代の芸能に影響を与えており、仮説のように、段階を追って重層的に読みを深めるために、「敦盛最期」をもとに室町時代に創作された謡曲『敦盛』と、江戸時代に書かれた浄瑠璃を原作とした歌舞伎の台本『一谷嫩軍記』とを副教材とした。

謡曲『敦盛』は、一の谷の合戦後、亡霊となった敦盛が、熊谷(蓮生法師)の前で思いの丈を語り、恩讐を超えて相手を許すという内容である。歌舞伎『一谷嫩軍記』は、敦盛の身代わりとして我が子小次郎を犠牲にする熊谷の苦悩が描かれる。いずれも、もとの『平家物語』の主題を発展・深化する形で翻案された作品であり、教材の示し方を工夫することによって、高校

生にも十分に読み取れる内容と考えた。

『敦盛』は、観世流の謡本を本文として3分の2程度に抜粋し、『一谷嫩軍記』は、「組討の場」「熊谷陣屋の場」の本文を場面ごとに抜粋し、そこに、あらすじやイラスト、歌舞伎の舞台写真等を加えて、視覚的にも理解しやすい、平易な教材を作成した。

単元の指導と評価の計画は第1表の通りである。

第1表 単元の指導と評価の計画(各授業時間は65分である)

	ねらい	学習活動	評価の観点と方法	
第1段階の読み	1時	○作品について基礎的な知識を持ち、学習意欲を高める。	『平家物語』の基礎知識を持つ。 ・『平家物語』のデジタル教材を視聴し、小テストで内容を確認する。 ・地図や、甲冑のレプリカを見ながら、時代背景や合戦のあらましを理解する。	【知識・理解】 小テスト・ワークシートの記述の点検
	2時	○助動詞等の働きから本文内容を読み取る。 ○会話に着目して、登場人物の心情や立場を理解する。	『平家物語』『敦盛最期』前半の内容を読み取る。 ・助動詞カードを用いて助動詞を学び、文意の読み取りに役立てる。 ・会話を自分の言葉で表現し、作中人物の身分や立場の違いに気付く。	【知識・理解】 ワークシートの記述の分析
	3時	○心情語に着目し、登場人物の心情を読み取る。 ○人物像や主題をとらえる。	『平家物語』『敦盛最期』後半の内容を読み取る。 ・「あはれ」「いとほし」等の表現から、熊谷の心情の推移を考える。 ・人物像や主題についてワークシートに記入し、第1段階の感想文を書く。	【読む能力】 ワークシートの記述の分析 感想文の記述の分析
第2段階の読み	4時	○「敦盛最期」をもとにした他作品に、興味・関心を持つ。 ○個人で比較読みをし、意見を持った後、グループワークで比較読みをする。	『平家物語』『敦盛最期』と、謡曲『敦盛』・歌舞伎『一谷嫩軍記』との比較読みをする。 ・個人で比較読みをした後、意見を持ち寄り、グループワークで比較読みをし、共通点や相違点を見付ける。	【関心・意欲・態度】 行動の観察 【知識・理解】 ワークシートの記述の点検
	5時	○グループワークを通して、異なる視点や考えに触れ、自分の考えを深める。	比較読みの発表準備をする。 ・比較読みを進め、変化の理由や創作意図を考える。 ・印象に残った一文を抜き出し、自分たちの表現で現代語に置き換える。 ・表現活動の形態を決め発表準備をする。	【関心・意欲・態度】 行動の観察 【読む能力】 ワークシートの記述の点検
	6時	○発表を通して学び合い、作品理解を深く確かなものにする。	比較読みの成果を発表する。 ・グループごとに、自由な表現で場面を伝え、作品間の変化とその理由・創作意図について、意見を述べる。印象に残った一文についても理由と共に発表する。 ・相互評価をする。	【関心・意欲・態度】 評価シートの記述の点検 【読む能力】 ワークシートの記述の点検
	7時	○様々な古典芸能に興味を持ち、古文に親しむ態度を養う。	能『敦盛』・歌舞伎『一谷嫩軍記(熊谷陣屋の場)』の映像を視聴する。 ・作品の基礎知識を復習する。 ・まとめの感想文を書く。	【関心・意欲・態度】 行動の観察 【知識・理解】 ワークシートの記述の点検 【読む能力】 まとめの感想文の記述の点検

##### (2) 検証授業の実際

検証授業の実際の流れについて、読み味わう能力を高める指導法の工夫とその時の生徒の様子とを、生徒が書いた授業後の感想等を交えながら、段階ごとに述べる。

##### ア 第1段階における指導法の工夫と生徒の様子

###### ・ICTの活用

段階を追って読みを深めるためには、正確な作品理解と内容把握とが前提となる。本研究ではICTを活用することで、限られた授業時間を有効に使い、必要な知識を指導できるように工夫した。具体的には、導入として、デジタル教材(NHK10ミッツボックス『平家物語』)や、写真・図をプロジェクターでスクリーンに投影し、時

代背景や作品を理解させた。

また、本文の読解では、黒い背景色のスライド上に白文字で作成した教材本文を、プロジェクターで黒板に直接投影した。授業の進行に合わせて、必要な本文を瞬時に映し出すことで、板書時間が短縮された。また、チョークで傍線や解説を書き込むこともできた。

ICTの活用は、生徒の集中力を高めることにもつながった。具体的には、内容確認の小テストの後、解答や文学史的事項を即時に黒板に投影して、自己採点をさせた。合戦場となった須磨の地形図も、生徒の手元のワークシートと同じものを投影し、源平両軍の動きを書き込みながら、短時間で理解をさせた。ICTを活用した指導法の工夫により、生徒を飽きさせないテンポの良い授業運びが可能となった。

#### ・助動詞カードの考案

所属校の生徒への意識調査で苦手意識が最も強かった助動詞を、生徒に無理なく学ばせるためにカード式の教具を考案し、作成した。第1図のように、意味等を文字で、活用形と接続を色と位置で示しており、縦に連ねて見ることで語相互の接続を視覚的に理解させるものである。裏面には基本形のみを示し、復習に活用する。黒板に磁石で貼る大判の教師用カードも用意した。生徒は色と位置によって接続がわかることに興味を示し、覚える事項の範囲にも目安ができたようだった。「色分けされて理解しやすい」「これで助動詞をマスターしたい」と授業後に感想を述べる生徒もいた。

#### ・ワークシートの工夫

限られた時間で確実に内容理解をさせるために、ワークシートを工夫した。課題として解かせ、授業前に提出させる。観点別評価を記入して返却することで、理解度に合わせた、生徒の読みを生かした授業が可能になった。誤記や不十分な記述は添削し、コメントを加えることで、正確な知識・理解の定着を図った。予習段階では設問を難しいと感じた生徒も、「一度自分で考えたことが、すぐに授業で解説されるので、興味が持て知識も定着した」と述べていた。白紙の解答にはCの評価を付けて返却し、再提出でBにする旨を伝えると、未提出や無記入の解答はほとんどなくなった。

#### ・言葉や表現を手がかりにした読み

文法事項や重要単語を覚えても読解に役立てることができず、学習を無意味に感じ、意欲が低下する生徒が多い。そこで、発問を工夫し、読解の鍵となる言葉や表現を手がかりに、正確で豊かな読みができることを実感させた。たとえば、自己の願望を表す助詞「ばや」から人物の心情の推移を読み取らせ、助動詞「ま

じ」から登場人物の強い感情を理解させた。また、形容詞「いとほし」等の心情語の多寡を分析させ、客観的な根拠に基づいて心情や主題を把握させた。

このように、言葉や表現に着目することで、恣意的ではない、的確な読みができることに気づき、古文は自分の力で読めると感じたころから、学習に前向きに取り組む生徒が多くなった。また、この学習を通して、原文ならではの味わいや古語の持つ言葉の力を感じ取り、「言葉一つひとつから心情がどんどん伝わり切なくなった」と述べた生徒もいた。「文法学習は内容をつかむためのものということがわかった」「助動詞を勉強すればもっと古文が読めるようになる」等、文法学習の本来の意義を理解した生徒も多かった。

#### ・古文への距離感を縮め、実感を持たせる工夫

活字から未知の世界をイメージさせることは難しい。そこで、実物を見せ、触れさせることで、古文世界へ誘うきっかけを作った。具体的には、甲冑のレプリカ（伊勢原道灌祭の借用品）を実際に生徒に着せ、装束描写や戦い方について説明をした。また、作中人物の会話を自分の言葉で表現させ、身分や立場、心情を実感させた。これらの工夫によって、生徒は短時間で作品の雰囲気をつかみ、理解も深まった。授業の活性化とともに、古文への距離感を縮めることにつながった。

第1段階の読みでは、これらの指導法の工夫から、生徒は、初読の時には無味乾燥に思えた古文の中に、生きて躍動する人間の姿を発見し、感想には「私が熊谷だったら」「敦盛は自分と同世代なのに」等、実感を伴った共感や批判が次第に出てくるようになった。

#### イ 第2段階における指導法の工夫と生徒の様子

##### ・比較読み

第1段階で読み取ったことを、さらに深め、自己のものとして感得させるための工夫として、本研究では比較読みを取り入れた。主となる古文作品と同じ題材を扱った別の作品とを読み比べることで、共通点や相違点を発見させ、書き手の意図や表現の特徴に生徒自身が気付いていく主体的な学習を組み立てた。

謡曲・歌舞伎台本といった未知の教材に不安感を持つ生徒もいたため、海外での歌舞伎公演の画像を紹介した。言葉が直接通じなくても高い評価を受けていることを知らせ、積極的に学習に取り組ませるための動機付けとした。次に、あらすじから作品を選ばせ、作品別に数人のグループを作り、教材を配布した。謡曲グループは静かに本文に読みふけり、歌舞伎グループは意外な展開に驚きの声を上げた。生徒は感覚的にそれぞれの芸能の質や享受の在り方をつかんでしまうようだった。続いて、読みの交流を通して『平家物語』との相違点を考察させ、その変化の理由や創作意図について検討させた。生徒は「敦盛最期」を再度読み返し、謡曲や歌舞伎台本との相違やその理由を考えるうちに、作品を単独で読んでいたときには気付かなかっ

たことを読み取るようになった。指導者は、机間指導やワークシートのコメントを通じて、適切な助言を与え、励まし、自信を持たせながら、話し合いの活性化と読みの深まりを支援した。

#### ・グループワークとTT（ティームティーチング）

受動的になりやすい古文学習において、生徒主体の読みを進めるために、グループワークを取り入れた。

気付きや発見を重視したグループワークからは、教員主導の授業形態にはない視野の広がり期待できる。学び合いの質を高めるために、該当クラスの古典担当教員とのTTを実施した。2人で机間指導を行い、生徒の疑問に答え、気付きに的確な言葉を与えながら、発表への方向性を示唆し、速やかな発表準備につなげていった。グループワークとTTを組み合わせることで、すべてのグループへの指導が行き届き、生徒の主体的な読みを深めさせることができた。

本文を声に出し、調べに聞き入ったり、何度も本文を読み、疑問点を解明したりと、生徒達はグループワークによって、主体的に作品と対峙し、そこから何かをつかみ取ろうとしていた。「知識ゼロからのグループワーク、自分たちで懸命に考え、わかった時は本当に楽しい」と感想にあったように、終了のチャイムに気づかないほど、集中して読み、話し合う姿が随所に見られた。

#### ・表現活動（発表）

活字から読み取ったものを、表現して相手に伝えるためには、深く確かな作品理解が必要となる。発表を目標に置くことで、グループワークも真剣なものになる。生徒主体の授業展開の山場である発表の場を設定して、授業の活性化を図り、また、相互評価やコメントを読み合うことで、重層的な作品理解をねらった。

発表は全員が関わるという条件で行ったが、2クラス10のグループにおいて、生徒全員の積極的な活動がみられた。具体的には、ペープサート（紙人形劇）や紙芝居、劇化等、自由な表現方法で場面を伝え、そのうえで、比較読みの成果を発表する。読み取ったことを効果的に伝えるために、各グループは発表原稿とともに、人物系図や制札・マネキンの首等の小道具を準備し、本番では甲冑のレプリカを着用したり、演技を止めて説明を加えたりと様々な工夫を凝らしていた。

比較読みの成果として、あるグループは、『平家物語』で多くを語らなかつた敦盛が、謡曲では饒舌である点を指摘し、理由を「死ぬことで初めて平家の大將軍としての立場やプライドから解放されたため」とし、16歳の若者としての思いが伝わってきたと述べた。「平家物語であまりに悲劇的だった2人に、少しでも救いを与えるために能が作られた」と創作意図をとらえ、「前作での苦しみ・悲しみは消え、晴れ晴れとしていた」と、作品観を説明した。また、『一谷嫩軍記』では、熊谷の出家の理由が異なる点に着目したグループ

は、「あやめた人物が違っても、その人に対する熊谷の思いはとても深い」とし、「時代と己の信念との間で葛藤する様は現代人にも当てはまる」と解説した。また、「平家物語にはない女性を登場させたのは、子を失う親の悲しみを観客に共感させるため」と指摘したり、敦盛の身代わりとなった小次郎に共感して、「死を選んでまで守る大切なものがあつた点で平家物語の敦盛と共通している」と指摘したグループもあつた。

表現活動を通して実感を伴う読みが確立し、発表を互いに見合うことで、疑問が解消されたり、友達の読みの深さに感嘆したりと、貴重な学び合いの機会にもなつた。評価シートに相互評価とコメントを記入させ、後日、印刷をして配付し、振り返りとしたが、自分たちの意図したことが伝わった喜びや、不十分だった点の反省等を口にしながらも、達成感を味わっていた。

#### ・舞台映像の視聴

発表に続いて、能『敦盛』、歌舞伎『一谷嫩軍記（熊谷陣屋の場）』の舞台の映像を視聴させた。グループワークで謡曲や歌舞伎の内容や特徴をつかみ、発表で自らが表現者となる経験をした後に、舞台映像を見せる順序を取ることで、今まで敬遠していた古典芸能に関心を持って触れさせ、自分たちの読みを確認・深化させる効果をねらった。

映像教材には平成19年8月、藤沢遊行寺で上演された新能『敦盛』を撮影したものと、市販の歌舞伎のDVDを使用し、生徒が選んだ場面を中心に、それぞれ15分程度で視聴させた。反応は良好で、特に発表した場面や、担当した人物が登場すると強い興味を示し、画面に見入っていた。能を見て「穏やかな空気の中にも何とも言えない悲しさと無念さが表現されている」と感想に書いた生徒や、歌舞伎を見て、演じる役者の表情から息子を身代わりにせざるを得なかつた熊谷の苦悩の深さに初めて気付き、胸を衝かれた生徒も多かつた。このように、発表の時点での読みは、古典芸能を映像で見ることによって、さらに深まっていた。

第2段階では、『平家物語』を謡曲・歌舞伎と比較読みすることにより、第1段階での「敦盛最期」の読みを踏まえて、より多角的に深く作品を読み、味わい、かみしめることができた。敦盛や熊谷といった登場人物の生き方に対しても、自分のことのように痛切に感じ、心を動かしていく生徒が多かつた。

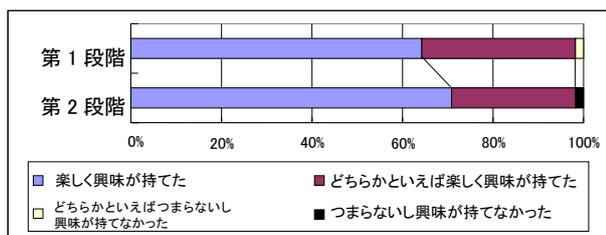
#### (3) 検証授業の結果

検証授業の結果について、授業実践の前後に行つたアンケート、調査テスト、各段階の最後に書かせた感想文の3点を分析しながら考察した。

##### ア アンケート結果から

今回の検証授業（単元『平家物語』を読み味わう）について、62%の生徒が「楽しく興味が持てた」と回答し、「どちらかといえば楽しく興味が持てた」と答えた生徒と合わせると98%になつた。続いて、第1段階と

第2段階の学習とに分けて質問をしたところ、第2図のように、肯定的な回答が段階を追って増加した。



第2図 第1段階と第2段階の学習の比較

また、各段階の学習に楽しく興味を持てた主な理由については、第2表の通りであった。

第2表 第1段階と第2段階の学習に興味を持てた理由

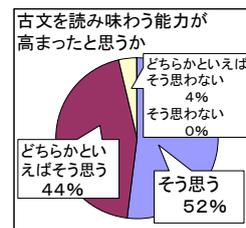
第1段階 (複数回答可)	
登場人物の心情がつかめるようになったから	82%
当時の人のものの見方・感じ方・考え方を知ることができたから	57%
古い言葉を学ぶことで語彙が増え、言葉の感覚が磨かれたから	13%
助動詞等の言葉の働きを使って文章を読むことができたから	11%
第2段階 (複数回答可)	
比較読みでそれぞれの作品の特徴やよさがわかったから	73%
表現活動を通して実感を伴って理解することができたから	55%
グループワークで友達と意見交換ができたから	49%
作品を支え、伝えてきた人々の存在を意識することができたから	18%

第1段階では、古人の心情や考え方をとらえる力がついたことが興味・関心につながり、第2段階では、比較読みや表現活動等の新たな工夫によって、内容を深く読み取り、味わうことができたと感じるにつれて、興味・関心もさらに高まったことがうかがえた。また、「作品を伝えてきた人々の存在を意識することができた」等、古文学習に対する意識の変化も見られた。

続いて「日本の文化や古典芸能（能・歌舞伎等）に興味・関心があるか」という質問について、事前アンケートでは16%の生徒が「ある」と回答し、見たことがある生徒は26%であった。事後には「能・歌舞伎などの日本の古典芸能に興味・関心を持ったか」という質問に40%が「持った」と答え、「どちらかといえば持った」とあわせると、96%になった。「今後、能・歌舞伎を見たいと思うか」では、33%が「思う」と回答し、「どちらかといえば思う」を合わせると、92%であった。自由記述の中には、「優雅できれい」「圧倒された」等の感想や、「知らなかったが、日本の文化はすごい」と、強い関心を寄せたものも多かった。また、「感情の起伏を感じ取ることができた」と心情理解の助けになったとするものや、「自分達の発表にくらべ、比較にならないほど上手だった」と、表現活動との関連を述べ、役者の卓越した技量に気付く生徒もいた。このように、第2段階で表現活動と併せて能・歌舞伎を映像で見せたことは、日本の文化を伝える古典芸能について、ほぼ全員に興味・関心を持たせることにつながった。また、多くの生徒が、事前学習の必要性を述べたが、指

導者の側がすべてを解説してしまうのではなく、生徒自身の活動の中で、ストーリーや特質を把握させたことが、興味を引き出し、理解を助けたと考える。

今回の単元を終えて、「古文を読み味わう能力が高まったと思うか」と質問したところ、生徒の自己評価ではあるが、第3図の通り96%が肯定的に答えた。



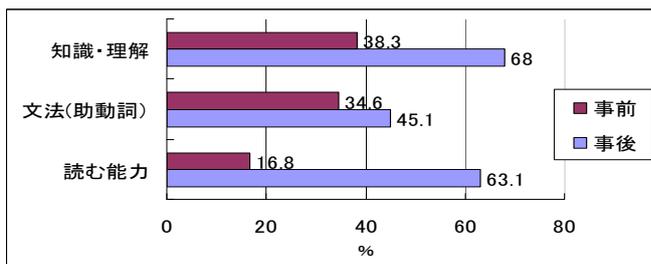
検証授業前後の古文学習に対する意識の変化を見ると、事前では、高等学校の

古文学習に対して、「楽しく興味を持てる」と答えた生徒は13%で、「どちらかという楽しく興味を持てる」と合わせて6割弱であったのに対して、事後アンケートの自由記述では、9割以上の生徒が古文学習に興味・関心を持つようになった旨を書いた。古文は「とらえどころがなく難しい」という意識も「読めればこんなに面白いものはない」と変化し、「もっといろいろな古文を読みたい」「能や歌舞伎を実際に見てみたい」と、今後も積極的に古文や古典芸能に親しんでいこうとする態度を身に付けた生徒も多かった。

以上のアンケートの結果からは、段階を追った指導法の工夫により、作品への興味・関心と読む能力とが密接に関連しながら漸層的に高まり、その経験によって古文学習や古典芸能に対する意識も変わっていったことがわかった。

### イ 事前事後調査テストから

『平家物語』『敦盛最期』本文についての事前事後調査テストの正答率を比較すると、第4図の通りであった。なお、知識・理解と読む能力は同一問題、助動詞は類似問題を出題しての調査である。



第4図 調査テストの正答率の比較

範囲を限定した同一問題、類似問題による調査テストの結果ではあるが、知識・理解、文法（助動詞）、読む能力が、それぞれ高まっていることが分かる。

読む能力を問う設問に顕著な伸びが見られるが、解答の記述内容にも明らかな質的な変化が見られた。特に、抽象的な感情を説明させる設問では、事前テストに無記入や稚拙な表現が多かったのに対して、事後テストは解答の文章量が増え、獲得した語彙を使って表現しようとする態度が身に付いたことがわかった。「宿命・心の叫び・覚悟・潔い・健気・命乞い・優雅」等は事前テストには見られなかった言葉である。

## ウ 感想文の記述から

第1段階の最後と、第2段階の最後とにそれぞれ感想文を書かせ比較をしたところ、文章の量が、400字程度から1500字程度に増え、内容も質的に変化した。第1段階の感想では、敦盛に対して、「かっこいい・すごいと思う」「非現実的で信じられない」等、表面的な理解や違和感を述べたものが目立っていたが、まとめの感想文では、「平家の大将軍としての自分の運命に従って生きた点に感動した」「誇りを持ちその地位にふさわしい自分であろうとする意志が見える」「この悲劇は何ともいえない雅びと美しさを併せ持つ」と、理解が深まった。熊谷に対しても、功名心と情との間で揺れる武士というひととおりの理解から、「人間的で不器用な熊谷がどこか愛しい」「人としての心を押しとどめることのできなかつた彼をたたえたい気持ちでいっぱい」「まるで現代文の小説を読むようだった」というように、自分なりに登場人物に感情移入していく姿が見て取れた。「敦盛の感情をあえて書かなかつたことで、無駄のない潔い文章になり、切なく美しい」と、『平家物語』の表現の特徴に生徒なりに迫つたものもあつた。また、「昔の人の行動を貫く信念や誇り等、日本の良い点を残して行くことは必要ではないか」と、自国の伝統や文化を継承することの大切さを述べたものも見られた。感想文の記述からは、段階を追つて古文を読む力が付き、作品を深く読み味わうことで、生徒のものの見方・感じ方・考え方も豊かなものになつたことがわかつた。

以上のように、アンケートにおける生徒の意識の変化や自己評価、調査テストの数値の変化、感想文の記述の量的・質的な変化から、段階を追つた指導法の工夫によって、古文を読み味わう能力が高まつたことが確認され、仮説は検証されたと考える。

## 5 研究のまとめ

本研究では、段階を追つた読みの工夫が、生徒に無理なく作品を理解させ、さらに深い読みへと導き、読み味わう能力を高めることを検証した。第1段階では、指導者の働きかけによって、言葉や表現に根拠を求めて読解をする態度を身に付け、登場人物の心情理解を深め、さらに、文法学習の意義にも気付くようになった。第2段階では、学び合いや伝え合いといった生徒の主体的な活動を通して、それぞれの作品のよさや特質に気付き、振り返つて『平家物語』「敦盛最期」の主題をさらに読み深めることができた。比較読み、表現活動、舞台映像の視聴等を通して重層的に作品を理解し鑑賞することによって、古文の豊かな世界を知り、日本の伝統や文化に関心を寄せる生徒も多くなつた。

また、それぞれの読みの段階で抱いた思いを文章化させたことで、語彙力や表現力が身に付き、読み味わう能力の高まりを生徒自身に自覚させることにもつな

がつた。古典を読んで心を動かし、それを表現する習慣が付いたことは、次の漢詩の単元において、生徒が前向きに学習に取り組み、長い感想文を書くようになったという、所属校の報告からも確認された。

主体的な活動を重視するグループワークは、生徒の感受性を刺激し、思考を深めさせる効果が期待できる反面、個々の読みに指導者の目が行き届かず、誤つた方向に学習が進んでしまうこともある。今後、グループワークにおいて、どのように正しい知識に基づいた充実した授業展開を図っていくかが課題である。

今回、古典芸能が比較読みの対象として有効なものであることが確認できた。『伊勢物語』『源氏物語』等においても、古典芸能と関連させた授業は可能であろう。また、比較読みの対象としては、他に、たとえば『平家物語』では、勅撰和歌集や、影響関係が指摘される漢文作品、現代評論等も考えられる。いずれの場合にも、生徒に理解しやすい形で教材を精選することが重要と考える。

## おわりに

「古文の文章の言葉に無駄なもの一つもないと知つた」と生徒が感想に書いた。若いときに日本語の美しさや魅力に触れる経験、心を動かし視野を広げる経験を積むことは、自国の文化を理解し、それを尊重し、誇りに思い、継承しようとする態度につながっていく。

日常的には文語に触れる機会の少ない生徒達だが、作品の魅力に触れさせ、気付きを促すことができれば、柔軟な感性と新しい視点で、古典の現代的な価値をとらえることができる。古典学習の新たな可能性を今後も探究していきたい。

## 引用文献

- 国立教育政策研究所 2007 「平成17年度教育課程実施状況調査・同質問紙調査集計結果国語総合」([http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei\\_h17\\_h/h17\\_h/result\\_q115.pdf](http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h17_h/h17_h/result_q115.pdf) (2007/5/8取得))
- 中央教育審議会答申 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shoutou/new-cs/news/20080117.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shoutou/new-cs/news/20080117.pdf) (2008/1/18取得))
- 石井茂 1982 『古典の指導法』 右文書院 p. 94
- 伊東武雄 2003 『高校古典教育の論究』 溪水社 p. 3

## 参考文献

- 観世左近(廿四世) 1975 『敦盛』 檜書店
- 佐成謙太郎 1963 『謡曲大観 第一巻』 明治書院
- 戸板康二 他 1970 『名作歌舞伎全集 第四巻』 東京創元新社
- 藤原与一 1974 『私の国語教育学』 新光閣書店